

ねじりはちまき

2月 立春 雨水の月になりました。

2月3日 節分です。4日 立春、11日 建国記念日、12日 初午、
14日 聖バレンタインデー、19日 雨水、23日 天皇誕生日、今年は
2月29日までありますね。

初午（はつうま）の日はその年その年によってまちまちですが、2月5日の
前か後かによって、その年の収穫や1年の吉凶を占うこともあります。

2月5日以前であれば豊作、6日以降であれば不作といわれています。

初午の頃は火事の出やすい時期なので、初午の日が早い年には火事が多いと
いう伝承が全国各地に残っています。近畿地方などでは厄落としと厄除けの
日として、厄年の男女が社寺に参拝する光景が見られます。

今年もまたインフルエンザやコロナが流行りだしているようです。

気を付けたいと思います。

幸田 常一



<会社近況>

郡山市の現場で住宅建設工事をお世話になっております。

また事務所ではお客様と打合せをさせていただいたり、図面や必要
書類の作成などしています。

※季節の七十二候※

日本には二十四節気があり、これをさらに3つずつに分けたものが七十二候で1年を72の季節に分けています。動物や昆虫、鳥や魚、植物、お天気などを通して季節の移り変わりを感じる事ができます。

2/9～2/13頃は、「黄鶯睨皖」ーうぐいすなくー

うぐいすの美しいさえずりには癒されますね。

「ホーホケキョ」と鳴くのはオスで、オスはメスを誘うために鳴いているのだそうです。たまに上手に鳴けず、練習中！のうぐいすもいますね。

鳴き声を整えている状況を「ぐぜり鳴き」と呼ぶそうです。それもまた微笑ましいですね。今年も楽しみに待ちたいと思います。

<2月> 旬な山芋

今月は「山芋」をご紹介します。私ほしのも山芋は大好きです。😊
すりおろしたあとに今度はすり鉢であたると、口あたりがより滑らかになり、おいしいです。山芋は疲れた胃を助け、疲労回復、滋養強壮の効果があるようです。生で食べる他にもお好み焼きに入れたり、天ぷらも、コトコト煮てもおいしいです。山芋を食べて疲れを癒して下さい。💡

令和6年 2月5日発行

有限会社 幸田建設
<発行責任者>幸田久美

〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1番地1

電話 0243-44-3816

<後記>

花粉症は今や生活まで影響する国民病ですね。アレルギーの方は毎年様々な対策をしているかと思います。今年は早めに花粉が飛散するようです。

(ほしの)

江戸時代の教育力

最近歴史に関するものが続いているが、今回も歴史もので江戸時代の文化について取り上げたいと思う。というのは、江戸時代は260年間続く中でかなりの文化水準に達していたのではないかと思うからである。明治時代に入っていくなり、欧米に追い付き追い越せといきり立っても歯車がうまく回転しなかったに違いない。それは武士対庶民という身分制がある中で、その枠を超えて世を動かすエネルギーが漲ってきたのではないか。そのエネルギーが人々の心を、好奇心・探求心となって時代を動かしたのではないかと思う。

江戸時代の中で、特筆すべきは「寺子屋」の存在である。寺子屋とは庶民の子弟たちの教育施設である。江戸中期から始まり、後期においては全国に2万か所あったであろうといわれる。そして驚くべきは、日本国民の識字率は80%に達していたのではないかと言われることだ。これは当時としては、世界的にみても最高水準に達していることを示している。では寺子屋はなぜ誕生したのか、そしてどういう仕組みで教育をしたのか、またどのようにして全国に広まっていったのであろうか、今回はその辺のところをみていきたい。

先ず、各藩には武士の子弟を教育する藩校が設けられていた。会津藩にも日新館という藩校があった。藩校では、儒学（四書五経で政治倫理を学ぶ）を教育の柱とするところが多く、蘭学や医学を教えるところもあった。その外勿論、兵法や武芸も取り入れられた。藩校以外では、蘭学者や儒学者が個人で開く私塾があった。私塾では武士や志を持つ町人らが師匠専門のオランダ語や数学技術など高度な内容を学ぶことができた。

さて寺子屋であるが、寺子屋は庶民（町人や本百姓）の子弟の教育施設である。生徒は10人前後で、上限が14歳までで、4~5年在学できたようだ。師匠は、僧侶や神官、下級武士や職の無い浪人などで、後になると町人（寺子屋卒業の）の師匠が多くなったという（師匠には女性の師匠も誕生する）。寺子屋というのはどんな施設かということ、実は特別のものではなく師匠の住まい（寺・神社・住宅）であった。

（注）なんで寺子屋というのかだが、起源は中世の寺院教育を母体に行っているようだ。寺子屋で学ぶ内容はどうだったか。通常「読み・書き・そろばん」といわれる。つまり、庶民が商人、職人、百姓としてそれぞれ生きていく上で必要な実用的なもの・初歩的なものを学ぶことができたのである。例えば、「読み」はひらがな・数字・九九・地名・名字・手紙の書き方・商売に使う用語などである。「書き」は手習い、今でいう習字である。商いには「そろばん」が欠かせない。ただし、そろばんがどこでも習えるようになったのは後期になってからのようだ。どちらかということ生徒は商人の子弟が多かったのかも知れない。生徒は少人数なので、本人のやる気・自主性を尊重しながら、本人にあったカリキュラムを用意して教育に当たったといわれる。それとテキストはあったのだろうか。全寺子屋で使用されたものではないだろうが、人気のあるテキストはあったのである。当時は「往来物」と呼ばれていた。最も使用されていたのが「庭訓往来」というテキストである。また漢字の学習用としては「小野算歌字尽」、算術の入門書としては「塵切記」が使用されたという。様々なテキストが登場するのは印刷技術（木版印刷）の発達と相まってのことだ。なぜ寺子屋へのニーズがたかまり、寺子屋が増えていったのか。それは、江戸時代になり、戦乱のない安定した社会が訪れ、町人文化が台頭するにつれて、庶民の間にも徐々に文字を学ぶことの必要性和重要性に対する認識が高まり、文字習得の動きが広がりを見せるようになったのだ。また、京都の町衆によって始められた、営利を目的とする出版事業が江戸にも伝わり、多様な形態へ変化しながら発展し、幅広い層が活字に触れるようになったのも一因である。そうした江戸時代の文化の発展において、庶民に「読み・書き・そろばん」を教える学習機関であった寺子屋が大きな役割を担ったと言えるだろう。師匠を務めたる人たちに敬意を表したいと思うし、また子弟を是非学ばせようとした親世代にも敬意を表したいと思う。

町人文化という言葉が出てきたが、これは江戸を中心に栄えた文化で、文化・文政（1804~1830年）時代が最盛期であった。民衆は生活に余裕が出来るにつれ、社交や教習（教養や習い事を身に付ける）に出向き、それがまた生活の一部となってくる。そのことにより、社交や教習が盛んとなり、町人文化が栄える。町人文化として栄えたのは、例えば浮世絵や滑稽（こっけい）本、歌舞伎や川柳・俳句などである。俳句でいえば、前回松尾芭蕉を取り上げたが、芭蕉が活躍したのは元禄時代で、化政文化時代は小林一茶や与謝蕪村が活躍し、俳諧も民衆に一層の広がりを見せていた。一方この化政文化時代は、町人文化のみならず、国学や蘭学などの学問分野でも然るべき人材を輩出し、歴史に残る大きな成果を挙げている。余談ながら、浮世絵のことで一言触れておきたい。それは、その作成作業は分業化されていたということ。浮世絵は木版印刷で、絵師一堀（ほり）師一刷（すり）師の三者により仕上げられる。だから絵師だけでは仕上がらない。三者の連携がうまくいかなければならない。絵師・葛飾北斎のドラマを見たことがあるが、道理でアトリエには人が多いのだと分かった。浮世絵は、色ごとに絵柄の異なった木版を何枚も掘り、重ね刷りすることで色彩豊かなカラー印刷に仕上がるのだから人手が要るわけだ。

さて、木版印刷ということが度々でてきたので、木版印刷について一言。木版印刷の技術が発達したことと数多くの版元（出版業者）が生まれたことが江戸の文化を根底から支えたということが言える。江戸時代には、仮名草子、浮世草子、草双紙、黄表紙という書物が町民の間に流行した。これは、寺子屋の普及とともに読み・書きが出来る人が増えたことによる。また、町内に配られるようになった「引札」（チラシ）や「かわら版」（新聞）、そして「稽古本」（教科書）などは木版印刷の浸透と深い関係があると言える。

最後に、私塾についてももう少し触れたいことがある。調べたところ、私塾で最も多かったのは、蘭学・蘭医学で36あった。次いで漢学（陽明学など）が27で、国学が9、和算が3、東洋医学が3、天文学が2などである。当時唯一開国していたオランダを通して西洋について学ぶ意識の高かったことが窺われて、正直驚いた。また、私塾からは明治維新から明治に入ってから活躍する人材を輩出していることも注目される。大阪の緒方洪庵の適々齋塾からは福沢諭吉を輩出している。尾形洪庵は天然痘治療に大きく貢献し、日本近代医学の祖と言われる人である。萩の吉田松陰の松下村塾からは我が国最初の内閣総理大臣を務めた伊藤博文や第9代内閣総理大臣を務めた山形有朋など、明治維新から明治新政府で活躍した人材を輩出した。彼ら若き藩士は吉田松陰の説く尊王攘夷思想に心動かされ、熱く燃えたのであった。吉田松陰は長州藩士で思想家であり、教育者であった。尊王攘夷の思想により各方面に攘夷の実行を迫る行動を起こしたが故に、安政の大獄で処刑される。以上で今回は終わる。こうして調べてみると、江戸時代というのは、西洋の植民地にならぬ力を各分野で培ってきたのではないかと思いました。

新年山行 安達太良山、那須連峰茶臼岳、雄国山

(百：日本百名山、◎：日本二百名山、○：日本三百名山、う百：うつくしま百名山、カッコ内の数字は標高)

【今回登った山】

安達太良山 (百、1700m)

茶臼岳(那須連峰ちやうすだけ 1915m) (百、那須連峰最高峰は三本槍岳 1917m)

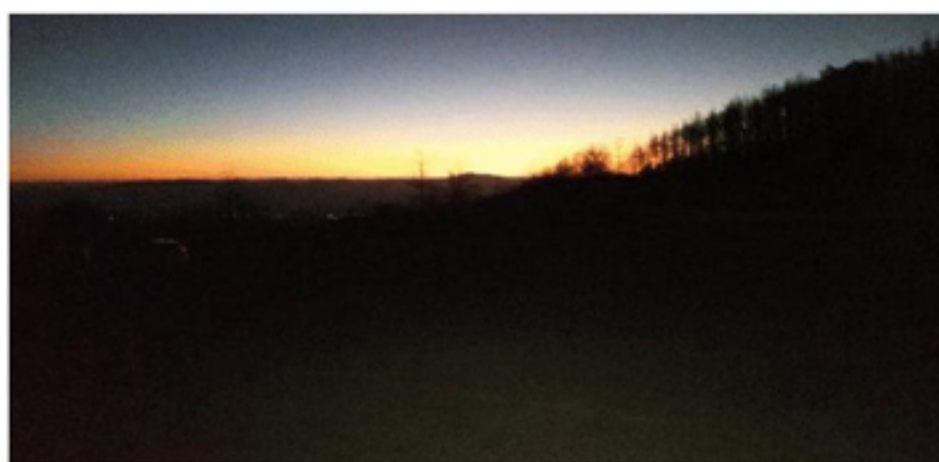
雄国山 (う百、おぐにやま 1271m、裏磐梯)

今年の登り始めは、冬場の体力保持のため慣れ親しんだ山にした。

○安達太良山

1月5日 (金)

自宅 5 時発。6 時前の奥岳スキー場駐車場から東方、阿武隈山系方面を望む。

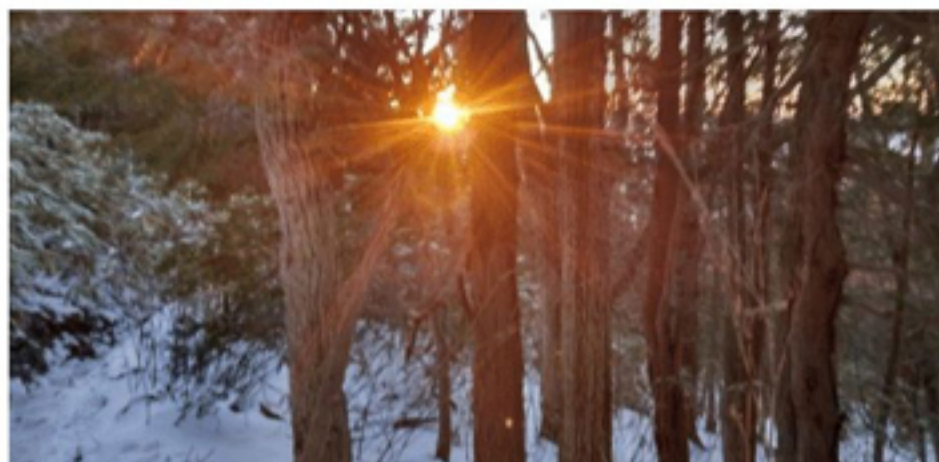


まもなく夜明けだ (写真左)。西の空には低く半月が白く光っている。

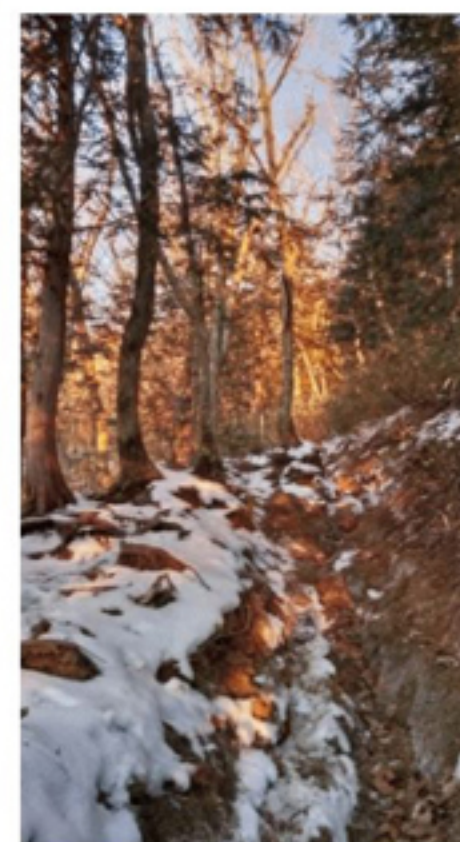
6:10 ヘッドランプを点けて出発、スキー場からはザ(ガ)ァー、ザ(ガ)ァーという音が聞こえる。人工降雪機の音だ。今冬は雪が

少なく困っているようだ。

杉林の間から夜明けの光が射し込む (写真下)。登山道 (旧道) も地肌が出ている (写真左)。



1 時間ほど歩き休み石で休憩する。休み石か
ンドラ山頂駅方面 (写真次頁)。今冬ゴンドラ
していない。運行は短いリフトだけだ。



る (写真左)。

らのゴ
は運行



朝焼けの山肌は紅葉のときのように見える。

例年は雪が積もり吹き溜まりとなり右下がりの斜面になっている登山道も夏道の形がそ

のまま残っている（写真下左）。



登山道の先に箕輪山（1728m 安達太良連峰最高峰）がきれいに望める（写真下）。



くろがね小屋と左上の矢筈森（写真下）。

小屋分かりますか？

ラスを着け左に登って行く。9：30。



小屋の所でアイゼンとサング



峰の辻 (写真左)。標識の左奥の山(丘)は籠山(かごやま 1548m)。風もそれほど強くないので、稜線を目指す。



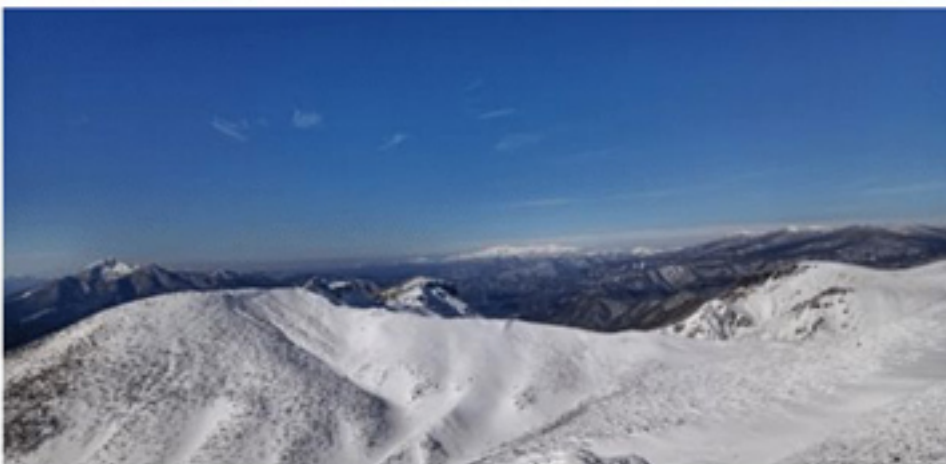
峰の辻から見た稜線。左端の岩コブが山頂 (写真左)。



牛ノ背からの山頂 (写真左)。



10:45 山頂着。写真左。



山頂から西方を望む (写真左)。手前が船明神。左端奥が磐梯山。右手奥の白い山並みが飯豊連峰。

11:05 下山開始。峰の辻やくろがね小屋に戻らず、久しぶりに東側のロープウェイ山頂駅、五



葉松平方面に縦走することにする。小屋に人がいなければ吸引力はなくなる。安達太良山の東南側は、景観が開け開放感がある。

12時薬師岳パノラマパーク着。ここは山頂駅から一登りしたところでベンチとテーブルがある。かぶっている雪を片付け、おにぎりを食べる。

30年ほど前の夏場、妻と二人で、歩行が不自由になっていた父をゴンドラに乗せ、妻は車いすを、自分は父を背負いこのベンチに連れてきて昼食を食べたことがあった。父はほんとに嬉しかったようで、その後父の枕元にはその時の写真がずっと飾られていた。

左の凸が地元で乳首山とも言われている安達太良山頂(写真下)。



12:30 下山開始。五葉松平(写真下)を經由しスキー場まで下る。人工降雪機による雪はすでに解けていた。



13:30 アイゼンを外し歩き始めた途端、薄い氷の所で転び右手を強打した。車まで50メートルもない所、いつも注意していたが、最後の最後で気が抜けたらしい。

安達太良山新年初山行は、「ケガは下りの、最後の所」という教訓を再び三度、確認する山行となった。

○那須連峰 茶臼岳

茶臼岳には二年前の1月30日、今回と同じ湯本温泉の先、大丸温泉手前の栃木県営無料駐車場から登ったが、風が強く稜線の峰の茶屋跡避難小屋でおにぎりを食べて帰ってきた。今回も無理をせずに、行けるところまで行こうと思った。

1月10日（水）

自宅5:15発、東北道那須IC経由県営駐車場6:40着、4台停まっていた。東の空が明るくなってきた。6:50過ぎ、日の出に向かい手を合わせる。



7:15、アイゼンを装着し、立派なトイレ施設の脇から出発、車の温度計は0°を示している。少し風がある。標識（写真下）。



ロープウェイ乗り場の先の「峠の茶屋」の広い駐車場（雪のない時はここまで車で行ける、写真下左）まで延びる県道を縫って登って行く。傾斜は緩やかで雪は踏まれていて歩きやすい。

ロープウェイはもちろん動いておらず、峠の茶屋も閉鎖されている。登山指導所（無人）の所でインナーを一枚脱ぐ。登山口（写真下右）、すでに何人かの踏み跡がある。



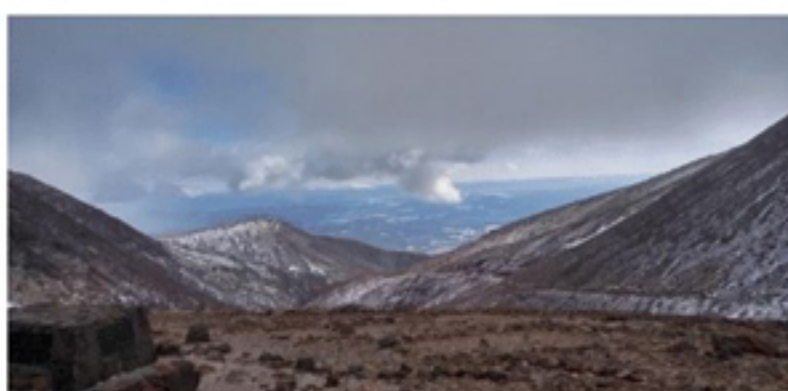
2年前の写真と比べてみると今年は雪が少なく、鳥居を潜って、橋も見えた状態

で渡ることができた。

樹林帯を抜けると風が強まる、稜線の鞍部に避難小屋が建っている。8:40下山してきた人と話す。茶臼岳の反対側・右側の朝日岳（1896m）に登ってきたとのこと。稜線の風が強かったとのこと。



下界は晴れているが（写真下左）茶臼岳方面はガスがかかっている（写真下右）。



9:40 避難小屋着。水分を補給する、指先が冷たく動きにくい。茶臼岳から二人下りてきたので話す。風は吹き飛ばされそうには強くないので大丈夫、S字を描くように登って行けばよいとのこと。自分も何度も登っているので、その表現の仕方に納得する。

9:50 出発、岩のゴロゴロしているところを、S字を描くように登って行く。ガスがかかっているが百メートルくらい先は見通すことができる。時折風が強くなる。危険なところにはその先に行かないように鎖が張ってあったり、「危険」の標識がある。山頂を目指す標識には番号と距離が書いてある。百名山ならではの親切さだ。お鉢の反時計回りで、まずは山頂の標識（写真次頁上左）、石の社の裏側（写真次頁上右）に着く。10:35。岩を登って那須岳神社（写真次頁中）の表側に回る、。



那須岳神社に参拝する。二礼二拍手一拝一礼。神社には鳥居もあった（写真下左）。自分は裏側から社

に近づいたらしい。丁寧な標識に導かれて避難小屋に下る（写真下右）。



11:25 避難小屋着。休憩し 11:45 出発、12:15 駐車場着（写真下）。晴れていた。約5時間の那須茶臼岳登山を無事終える。



車の中でゆっくり食事し、東北道経由で帰宅する。

○裏磐梯 雄国山

雄国山には二年前の2月19日、今回と同じ雄子沢(おしざわ)登山口から登り、山頂で一緒になった仙台の3人グループに付いて行って、積雪の、夏道のないルートを駐車場まで周回したことがあった。彼らはYAMAP(携帯電話の登山GPSアプリ)を使いこなして初めてのルートにチャレンジしていた。

今回の雄国山は、20年以上前の職場の同僚だったNさん(女性)とご一緒した。年賀状に山のことが書いてあったので、寄稿文「登り納め 阿武隈3山 令和6年元旦の計」を送ったことから連絡を取り合い、雄国山と一緒に登ることになった。

1月28日(日)

自宅を6時過ぎ出発。磐越道経由で待ち合わせ場所の猪苗代道の駅に7時前に着き、建物に近い所に停車する。車はかなりの数、数十台止まっていた。道の駅に着くまでは、おそらく車の数も少ないだろうからすぐに分かると思っていたが困ってしまった。しかも長い期間を置いての再会になる。

建物の方に小走りにやってくる女性がいたのでダメもとで話しかけてみたらNさんだった。本当に久しぶりの再会の挨拶を交わす。

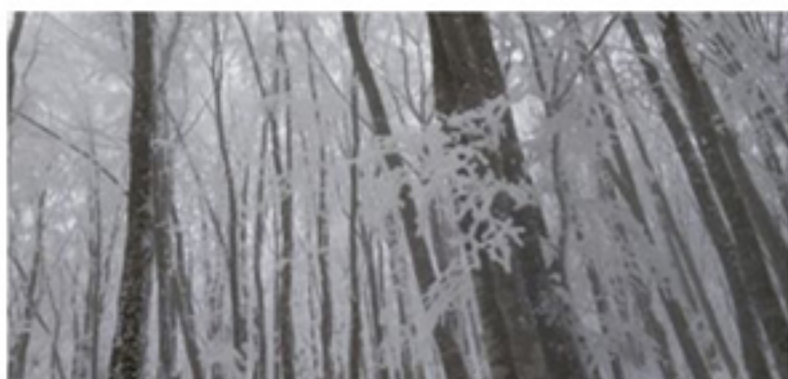
雪道は得意でないというNさんが、荷物ともども自分の車に乗ってきて雄子沢登山口に向け出発。7時半過ぎ登山口に着いたが駐車場がほぼ満杯だった。雪で駐車場所が狭くなっている上にすでにビッシリ停まっていた。

(写真下、下山時撮影)真ん中の通路を残し道路側(写真右側)の雪に乗り上げるようにしてぎりぎり停める。



自分はスノーシューをNさんはワカンを着けて8:10出発。夏道は登山口からすぐに右の山に入って行くが、積雪時はしばらく沢沿いに進んでから右に斜面を登り夏道に合流する。踏み跡はしだいに狭くなり夏道の形がなくなり雪の斜面をトラバースする形になっていく。踏み間違えると斜面を左の沢の方に滑り落ちることになる。そんなに急ではないが同じ場所に復帰するにはエネルギーと時間を浪費することになり、ケガのリスクも発生する。

9:20休憩する。激しくはないが雪が舞っている(写真下)



雄国沼へ向かう踏み跡と雄国山へ向かう踏み跡が数本現われて混乱する。Nさんの携帯のYAMAPで確認して修正し、目印の看板の所に着く（写真左）。



ここから踏み跡をたどり、枝に雪をまとった樹林帯の中を木々の間を縫ってジグザグに登り尾根にたどり着く。少し休み山頂を目指す。少し空が一部明るくなってきた。

11:05 山頂着。次々に数グループが登ってくる。写真を撮りあう。



左側の展望やぐらは老朽化のため使用禁止のテープが張られている。

東側のガスが切れて磐梯山を望むことができた（写真下）。が猫魔ヶ岳や雄国沼、西の飯豊連峰は見えなかった。ほんの10分くらいでまたガスに覆われてしま

った。



自家製干し柿を口にし、水分を補給したぐらいで、11:30 下山開始。

雪が舞い始めた樹林の中を、木々の間を縫って雄国

沼との分岐まで一気に下る。雪が降り続けると踏み跡が消えてしまうので雄国沼には寄らずに先を急ぐ。

雄国沼の標高を境に林相（樹木の種類や生え方）が変わる気がする。



雄国沼分岐から下山中の森。
何とも言葉にできないが、

「いいね！」

13:25 駐車場着。猪苗代の道の駅まで戻り、近くの幸楽苑でラーメンを食べながら、共通の知人のことや今後の山行予定などの情報を交換する。互いに日程が合えばまたご一緒しましょうと約して、それぞれ帰途に就く。

山友は本当に久しぶりの再会でも全く違和感なく付き合える。驚きだ。

反省点、まだ自分はYAMAPを使いこなせていない。夏までにもう少し使えるようにし、日本三百名山、残り13座に備えたい。

令和6年2月 NO123 アンチ・エイジング 山旅遊人